

「対話的な学び」について考える 1 ～共感的コミュニケーションから始まる～

平成29年3月に公示された新学習指導要領において、授業改善の方向性を表すキーワードとして、「主体的・対話的で深い学び」という文言が示された。改善の目的となる「深い学び」を実現するためには、その学習過程が主体的な学びで貫かれ、さらに、そこに対話的な学びの展開が不可欠であると言われている。「深い学び」そのものの吟味が必要であるが、まずはそこへ至るための「対話的学び」とはいったい何なのか、どうすれば実現するものなのか、について考えてみたい。

演出家の竹内敏晴氏は、「子どものからだところ」ということについて述べた文章(注)の中で、想像力の基底をなす働きとして、「共感力」というものを取り上げている。

その中で、氏は、子どもたちにおいて日常的によく現出する「行動の伝染」という現象にふれ、子どもの身体には、「からだの共生性」という、言葉での理解以前にそれを支える無意識的な基盤が備わっていると述べている。例えば、幼児が集まっている所でだれか一人が泣き出すと、他の子どもまでわけもわからずにワワワと泣き出し、しまいには、みんなが一斉に泣き出してしまうということ。さらに、水たまりで長靴の中に水を入れて歩き出す子が出てくると、たちまちみんなが同じことをして、水が自分の脚にぶつかる感じや水の重さをはね上げながら歩くリズムの感覚などを、いっしょに面白く感じている。

氏によると、これは、言葉によって通じ合う以前に、同じ生理状態、同じ「からだ」の状態が、子どもの「からだ」から「からだ」へと伝播していったということになるらしい。

このことは、私たちが、日頃低学年子どもたちの中によく見かける姿ではないだろうか。

私も、かつて一年生の子どもたちと取り組んだ物語「くじらぐも」(作・なかがわりえこ)の学習で、竹内氏の言われるこの「共生性」の具体とも言える姿を目の当たりにした経験がある。くじらぐもとびのろうとしてジャンプした子どもたちが、いきなり風に吹き飛ばされてしまう場面の学習であった。

T 「そのときです。」って書いてあるけど、その時、何が起こったの？

C₁ いきなり、風がみんなをふきとばしました。

C₂ えっとね、風が先生と子どもたちをふきとばしたの。

C₃ 風がね、ビューンとみんなを空の上へふきとばしました。

C₄ あのね、ものすごく強い風がふいてね、みんな空へ飛ばされちゃった。

.....
.....
.....

私の発問と同時に、数人の子どもたちが立ち上がり、次々と話し始めた。C₁児からC₄児、さらに・・・と、一人の発言が終わると、その発言を受けて次の子が話し始める。同じことを繰り返しているだけのようなであったが、よく聞いていると、面白いことに気がついた。同じ内容について述べながら、子どもたちの説明は、強調しているところが少しずつ違っているのである。授業の後の研究会で、この授業場面の子どもたちの動きにふれて、参観されていた先生から、「低学年の子どもたちは、前に発言した人と同じことであっても、自分が言わないと気がすまないところがあるから、…」と、やや否定的な言

葉をいただいた。しかし、その時（授業中）の私は、子どもたちの姿に、この先生のとらえとは違うものを感じていたのを今も覚えている。

同じことを繰り返し発言する子どもたちの動きに対して、適当なところで打ち切り、視点を転換させるために教師は出るべきであるというのが、前述の先生のご意見であった。

しかし、C₁児からC₄児まで、子どもたちの発言をよく聞いてみると、それぞれが、前の子の発言に触発されて、少しずつ場面の出来事のイメージを新しくしているのである。曖昧な部分をもっとはっきりさせたい。印象づけられたイメージをもっと自分にぴったりの言葉で言い表してみたい。そんな思いに動かされて、子どもたちは喋っているのである。みんなで響き合いながら、それぞれが、自分のイメージをより豊かで確かなものにしようとしている。まさに、ファンタジーという虚構の世界に入り込んだ「共生性」としての「からだ」が、たがいのイメージを響き合わせながら、共感しあっているのである。

これは、一般的には「話し合い」とは見られない。しかし、「共感・共鳴」というレベルでは、たがいのイメージを響き合わせ、共有し合いながら見事に交流し合っていると見ることができる。これこそ、コミュニケーションの原初的な姿なのではないか。本来、この共感能力は乳幼児期の子どもたちに内在している力であるが、言葉を獲得し、言葉でのコミュニケーションが主流になるにつれて失われていきやすい力である。

「コミュニケーション能力の育成」が重要な教育課題となってから、国語科では、議論や討論の力をどう育てるかが大きなテーマとなっている。そして、さまざまな実践が展開され、その成果が報告されている。しかし、これらの成果の報告とは裏腹に、「いじめ」問題に代表される子どもたち同士の負のつながりが、今もなお解決されず、むしろ現状は次第に深刻化しているとも言える。

「人と関わる力」の基盤は、共感的に相手につながっていく体験によって形成される。育ちの転換期とも言われる10歳の壁を越えるまでに、一番大事にされなければならないのは、自分の周りの人たちとのつながりを心地よく感じる体験の保障であろう。余りにも早く大人になることを求められる生活の中で、現在、子どもたちは一人一人が切り離され、この心地よく共感・共鳴し合う心と身体の「共生性」が壊されているのではないだろうか。

人と人とのつながり方には、いろいろなかたちがある。相手に理解してほしい時、自分の思いや考えを素直に表現していくこともあれば、あえて理解を拒むかたちで相手に対することもある。相手を理解したい時も、相手を知りたくて素直に質問をしていくこともあれば、批判しながらも、自分が納得できるものを相手に求めていくということもある。等々、その時々で、私たちは、さまざまなつながり方を選んで相手とつながろうとしていく。

しかし、その基盤には、相手と共感的につながっていこうとする意識が動いているものである。この「共生性」が育っていない子どもたちに、互いを理解し合い、共に学び合うための「討論の力」を育てようとしても、土台無理な話である。高学年になって、「学び合い」の学習が困難になっているという悩みをよく聞くが、私は、子どもたちに必要な育ちの階段がはずれてしまっていることを、今こそ考えてみる必要があると思えてならない。

「学び合い」の成立に必要な「共感」を基盤とした交流を、もっと大事にしていきたい。「共感的コミュニケーション」こそ、「対話的学び」の原点であろう。

（注）叢書児童文学第一巻「ことば・詩・子ども」谷川俊太郎責任編集 世界思想社刊